
彼女

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女

【Nコード】

N0334G

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

「ねえ、彼女、居るの？」そんな突拍子も無い質問から始まる、日番谷の苦労を綴った物語。果たして、噂を流したのは？

変な噂

「…なんだよ…」

日番谷の第一声。

それも無理は無い。起きたら、眼前に雛森が居たのだから。

「ふえ？」

「ふえ？じゃねえよ。何でお前はこんなトコに居るんだよ」

静かに説教をする日番谷の姿は、常に怒鳴っている乱菊のときとは異なり、どこことなく優しさがある。

「あ、気持ち良さそうに寝てたから、うっかり覗いちゃって」

えへへ、と髪を掻きながら、日番谷にそう言う。

日番谷は「あのな…」と文句を言いながらソファから起き上がり、机へと向かう。

「仕事は？もう終わったのか？」

「もちろん！あたし、意外に仕事は得意なんだから！」

バカヤロウ、俺が半分以上やってるからだろうが、と言う言葉を日番谷はグツと飲み込み、「そうか」とだけ言って、筆に墨を含ませた。

紙に筆を近づけた瞬間、雛森が予期せぬ事を言い出す。

「ねえ、彼女、居るの？」

一気に肩の力が抜け、文字が曲がる。墨が変な風に滲み、そしてかすれた。

何時もの日番谷の字とは、確実に違う。

「…はあ？」

つい、呆れたような声がこぼれる。

肩に力を入れなおし、再度筆に墨を含ませた。

「何かね、皆噂してたよ？阿散井くんとか吉良くんとか…あ、浮竹隊長も！」

思い出すようにすらすると色んな人の名前を並べていく。
全員の名前を聞き終わったあと、順調に進んでいた筆が、ピタリ、と止まる。

「…あのな、居るわけねえだろ」

「やっぱりそうだよな？あたしが知らないんだし」

「まるで俺のすべてを知ってるような口ぶりだな…」

肘をついて、日番谷は呟く。

雛森はクスツと笑い、「さすがにすべては知らないなあ…」と日番谷を見てそう言う。

「すべて知られてたらたまったモンじゃねえな」

雛森を翡翠の目が捉え、そしてすぐに逸れる。肘をついたまま、目を閉じる。

そして、

「…そろそろ帰れ。あんま遅くなると俺が送ってかなきゃならなくなるだろ」

「あ、ホントだ！いつの間にこんなに暗くなっちゃったんだろ…」

時刻は既に午後八時。

慌てて扉を開けて、出て行こうとした雛森に、日番谷は慌てて声をかけた。

「何？日番谷くん」

「その噂…訂正しといてくれ」

その言葉を言ったときの日番谷の顔が、少し子供っぽくて、少し赤くなっていて、その顔に雛森は少し懐かしさを感じる。

「分かった！言っとくね」

じゃあね、と言う雛森の声に答えることなく、日番谷はまた資料の山へと向かう。

「…彼女…誰が流しやがった…？」

そればかりが気になって、日番谷の仕事の進みは何時もより確実に遅くなっている。

そもそも、今の自分に全く関係の無く、さらには関心までない噂なんかを、誰が流したのか。

色んな考えが頭の中を駆け巡り、ついには筆が止まった。

「彼女…」

筆を置いて、肘をつき、顎を手の上に乗せる。

あいている方の人差し指でこめかみを軽く抑え、必死に考えを巡らせた。

ぶつぶつ日番谷が呟いていると、ドアが勢いよく開き、べろんべろんに酔った乱菊が帰ってくる。

「あれ！？たいちょー、まだ仕事が残ってるんですかー！？」

「大声出すな！飲みすぎだ！量をよく考えろ！大して酒に強いわけでもねえんだから…」

今の乱菊何を言っても無駄だと知りながら、日番谷はそれでも説教をする。

乱菊は「あー、はいはい」と空返事をし、そのままソファに座り込んだ。

「あー！そつだ、隊長っ！…！」

乱菊がいきなり大声を出す。

「なんだよ…」

呆れたように、乱菊にそう言う。

筆が少し震えている。

表情は落ち着いていても、腹の中は煮えくり返っているのだろう。今にも筆が折れてしまいしそつだ。

「彼女、居るらしいですね！誰ですかー！？」

「ボリリューム下げろっつってんだろー！」

彼女のことより、まず声の大きさのことを注意する。
時間は既に深夜。

眠っている隊員のことを考えての事なのだが、今の乱菊はとてもじやないが止まりそうも無い。

「隊長、ホントですか！！？」

「居るわけねえだろ！！」

ついさっきもそんな話題があつた気がする。

そんなことも忘れて、日番谷は乱菊に対して怒鳴った。

乱菊はそれを聞いて、「やっぱりそうですよ〜…。誰が流したのかしら？」と一人納得したようにそう呟いた。

「待て。流したのはお前じゃないのか？」

「あたしな訳ないじゃないですか！あたし、口は軽いですけど嘘だけはつきませんよ！」

何故か乱菊は向きになってそう言った。

日番谷にとってこのように変な事が起こると、大体乱菊絡みなのだが、今回に限ってはそうでもないらしい。

「…誰がこんな変な噂流しやがったんだよ…」

はあ、とため息をついた日番谷は、また筆を動かし始めた。

訂正

あたしは今日も、阿散井くんのところへと向かった。
昨日の日番谷くんとの約束を守るために。

多分…甘味処に居るのかなあ…？

ガラガラっ、と引き戸を開けて、店内を見渡した。

——あ、居た！

赤色の髪が、よく目立つ。

「お、雛森！どうしたよ？そんなに慌てて」

「あ、あのね、阿散井くん…」

あたしが話そうとすると、閉めたはずのドアがまたガラガラっ、と勢いよく開く。

「おー、阿散井。こんなトコに居たのか」

「ん？檜佐木さんじゃないスか。どうしたんスか？」

阿散井くんががたっ、と立ち上がる。

「ほれ、今月号」

精霊艇通信。

確か、あたしの挿絵も入っていたはず…。
って、そんなことは今どうでもいいの！
阿散井くんに言わないと…。

「阿散井くん！」

久々に、しかも人前で、あたしは叫んでいた。

「…ど…どうした…雛森…？」

阿散井くんが固まってるのはまあ仕方ないとして…どうして櫛佐木さんまで固まってるのかな…？

そんな考えをあたしは振り切り、阿散井くんの目を見る。

「昨日の噂だけど…」

「噂？日番谷隊長のか？」

あたしはコクン、と頷いて、再度阿散井くんの目を見る。

阿散井くんが少し後ずさってるのは、気のせいだと思いながら、あたしは口を開いた。

「それね、嘘なんだって！」

「はあ？」

そんなもん、当然だろ。

…とても言いたげな声をあげる。

…もしかして…気付いてた？

気付いてなかったの、あたしだけ…？

「え、えと…阿散井くん、最初から疑ってたの？」

「当たり前だろ！日番谷隊長に彼女が居たらもうとっくに乱菊さんが言いふらしてるって」

それもそうだね…とあたしは頷き、阿散井くんから目を逸らした。何だか恥ずかしくなってくる。

こんなにムキになってて、しかもあたし、大声も出しちゃってて…。
どうしよう。

耳まで真っ赤になってくる。
それが自分でも分かった。

「おーい、雛森」

「は、はい！」

檜佐木さんからの呼びかけに、あたしは思わず声が裏返ってしまふ。
それがまた恥ずかしくて、俯く。

「俺、その噂…浮竹隊長から聞いたぞ」

「浮竹隊長、ですか!？」

「あ、俺も確かそうだったかな」

阿散井くんも揃って、それに頷いた。

「ほ…ホントに？」

「なんなら、確かめてくるか？」

「い…いやあ…また今度にしとくよ」

頭をもしゃもしゃと掻いて、一目散にその場を去っていた。
身体が勝手に動いて行く。

その身体は、十番隊舎へと導かれるように引かれて行った。

「日番谷くんっ!!!」

パンツ、とドアを勢いよく開けるのは何時もの事。

日番谷くんは特別驚くことも無く、何時もみたいに背筋を伸ばして

資料に向かっている。

「雛森…ドアはもつと静かに開けるよ…」

何時もみたいに、優しく説教してくる日番谷くんは前まで弟だったのについ最近はお兄さんみたいな存在になってきた。

「あのね、噂の件なんだけど…」

あたしがそこで言うのをためらっていると、後ろから聞きなれた声が聞こえてきた。

「俺らに教えたの、浮竹隊長なんすよ」

阿散井くんがひょい、とあたしの上から頭を出して、そう言った。少しあたしは驚いたけど、その話の流れにあわせて、頷いた。日番谷くんは不服そうに肘をついて、あたし達を見ていた。

「となると…浮竹に流した奴がいるって事だよな」

…浮竹隊長がこんな噂、流すはず無いもんね。

それはあたしにも阿散井くんにも、よく理解しているはず。

日番谷くんは不意に立ち上がって、あたし達の横をフツーに通り過ぎて行く。

「隊長にそんなくだらねえ質問しに行くのか、お前らは？」

すいっと翡翠の目があたし達から視線を逸らして、背中を向ける。

「自分の噂は自分で止めてくる」

…何だか、この噂に相当腹がたってるみたい。
今の日番谷くんには近付かないようにしないと危ないかな…。
あたしは、直感でそう思った。

怒りの矛先

「やあ、日番谷隊長。どうしたんだい？そんなに息をきらして…」
「うるせ…。そんなことより浮竹…」

俺は腸が煮えくり返ってるのを必死に押さえ込む。

——浮竹に怒鳴っても無意味だ…。
とにかく、こんなデマ情報を流しやがった奴を氷付けにしねえと気がすまねえ…。

「阿散井や檜佐木に変な事吹き込んだろ…」

かなりオブラートに包み込んだ言い方だが、まあ伝わるだろ。

「ああ、君に彼女が出来た…、と言う話かい？おめでとつ。俺も嬉しい…」

「待て待て」

浮竹の言葉を途中で区切って、浮竹に迫る。

「アンタ…まさか本気で信じてるのか？」

「違うのかい？」

「違うに決まってるだろ！」

俺の怒鳴り声に浮竹は一瞬肩をすくめたが、すぐに普段どおりの明るい笑顔を俺に向ける。

この野郎…バカにしてんのか…。

「そうかそうか！嘘の情報だったのか！」

「てめ…」

俺がまたもう一度怒鳴ろうと思ったとき、浮竹がとんでもない事を言い出す。

「いや、俺はすっかり雛森副隊長と付き合っただのかと思ってね」
「はあ!？」

周りから見て俺達はそんな風に見られてんのか？
ただの幼馴染じゃねえのか？
っーか…

「何で雛森が出てくんだよ…」

俺が独り言のようにそう言つと、浮竹が明るく言ってくる。

「君達の中があまりにも良すぎるからね。幼馴染以上に見えるんじゃないのかな」

「幼馴染以上つて…」

「たたく…」
呆れるぜ。

勝手に俺の彼女なんかを作るなよ…。

そもそも、幼馴染だからとか、仲がいいからとか…そんな理由で勝手な想像するなよ…。

言いたい事は山ほどあったが、今はそんな事を言っているほど暇じゃない。

とにかく、怒りの矛先を向ける相手は浮竹じゃない。
そんな事、いくら冷静さが欠けてるとはいえ、俺がするようなことじゃない。

「誰からその話聞いた？」

「あー、俺は京楽から聞いたぞ？」

京楽…。

酔った勢いで口からでまかせでも言ったのか？

…いや…確証も無い事を京楽が言うはずなんかねえよな…。

あいつもあいつで浮竹と似てるところがあるからな…。

「そうか、悪かった」

踵を返し、歩き出す。

京楽に伝わったとなると…やっぱり松本がらみなのか？

いや…松本は昨日知ったっぽいからな…。

そもそもそれがおかしいのか？

あいつ、酔った時の事はほとんど忘れてやがるからな…。

変な思い違いでそんな事を言ったのかもしれない…。

まあいい。

次は京楽に聞き込みだ。

…で…。

松本を問い詰めてみるか…。

解凍

「ら、乱菊さん、大丈夫ですかっ!？」

珍しく乱菊さんが黙り込んでたから、あたしはつい声をかけた。

そしたらその瞬間に顔がどどん青ざめていつちゃって…。

それで今、あたしはものすごくうるたえている。

「雛森…どうしよ…。アンタと会えるのは今日限りかもしれな
いわ…」

壁に額を押し付けて、力なくもたれかかっている乱菊さんは、まるで阿散井くんにバカにされて言い返せなかった吉良くんみたいな感じ。

それくらいに、覇気がなかった。

「どうしたんですか？乱菊さんらしくもない…」

幾らか落ち着きを取り戻したあたしは、乱菊さんの肩に軽く触れながら、そう聞く。

乱菊さんは顔も視線もこちらに向けずに、ただただ足元だけを見ている。

「あたしだ…」

「へ？」

乱菊さんがポツリと言った、その言葉。

『あたしだ…』？

意味も分からずにしばらく考えていると、乱菊さんが力なくフツと

笑う。

「隊長もそれくらい考えが疎ければいいのに…」

その言葉で、はっと気付く。

「ま…まさか乱菊さん！？日番谷くんに彼女が居るって噂流した」

あたしの言葉は途中で乱菊さんの右手によって遮られてしまった。
乱菊さんはあいている方の左手で、人差し指を立てて自分の口元に
持つて行く。

（静かに…？）

そのジェスチャーからその言葉を連想し、あたしはコクンと頷く。
乱菊さんはそれを見るとあたしの口から手を離して、そして深いた
め息をつく。

「あたし、絶対に氷付けじゃ済まされないわ…」

「で…でも日番谷くんだって、そんな酷い人じゃないし…」

あたしが慌てながらそう言うと、乱菊さんはどこか遠くを見るよう
な目でこつちを見てきた。

「あたしが氷付けにされそうになったら解凍してね…」

そう暗い顔で言う乱菊さんは、もうこの世の終わりを見てるんじゃない
かって言うくらいだった。

声のトーンからしても、何だか遺書みたいだし。

(…何か乱菊さんらしくない！)

あたしはそう思って、乱菊さんの腕を半ば強引に引つ張る。乱菊さん驚いて、「ちょ…雛森!？」と呼びかけてきた。でもあたしはそれを完全に無視して、走る。

日番谷くんの元へ。

「今から謝ればきつと許してくれますって!」

あたしはそう言いながら、十三番隊へと駆け込もうとする。でも、よく考えたら日番谷くんが十番隊舎を抜けてからもう一時間以上は経っているはずだから、ここには居ないかな、と隊舎に入る前に足を止めた。

「ここじゃないとすると…」

脳をフル回転させて、予想する。

鬼道みたいに簡単に組み立てられればいいのに…。
こういうときほど、つくづくそう思うのはあたしだけじゃないかもしれない。

「あ、京楽さん!」

咄嗟にその人の名前が出てきて、あたしは踵を返した。
もちろん、乱菊さんもしっかりと連れて。

「雛森、ホントに解凍…頼むわよ?」

「大丈夫ですって!日番谷くん、優しい人ですから…」

そう何回言っても、乱菊さんの顔は浮かばれない表情をして、見

てるこっちが苦しくなってくる。

（――普段明るい人がこんなに落ち込んでると、何か変だなあ……）
乱菊さんがこんなに怯えてるって事は…日番谷くん、相当怖いんだろうな…。

なんだか無関係のあたしまで怖くなってくる。

もし日番谷くんが怒って始解でもしちゃったら、ホントに解凍できるのはあたしくらいしかないし…。

総隊長がわざわざ解凍してくれるはず、ないもんなあ…。

そんな、今はどうでもいい事を考えながら、あたしは京楽隊長のもとへと歩を進めて行った。

氷付け

（京楽は——本当にそう言ったよな？）

さつき聞いた言葉を、もう一度脳内で整理し、何度も復唱する。
そう、つい数分前。

京楽から、俺はとんでもない事…もとい。
予想通りというべきか。
その事実を聞かされた。

「え？日番谷くんの彼女のこと？」

いつもみたいな、ゆったりとした口調。

普段なら、このゆっくりな口調を、急かすことなくいつも通り聞いていたんだろう。

でも、今の俺の状況からして、急かすことはもう当たり前行為だ。
堂々と、京楽の元へと歩み寄った。

「誰から聞いた？松本か？」

「え？えーと…」

返答を中々しない京楽に少し苛ついて、ダンッと机に掌を叩きつける。

そして、そのまま京楽の目を睨んだ。

その音に少し肩をすくめた京楽は、それでも普段どおりの口調で、俺の話を聞いてないかのように話し続ける。

「ああ…。そういえば居酒屋で乱菊ちゃんに聞いたのかなあ？」

もの凄い曖昧な答え。

何だよ？その『聞いたのかなあ？』って。

何で疑問詞が付いてんだよ？

「…本当か？」

普段よりも恐らく低めの声。

そんなことは京楽も気付いているんだろう。

額の辺りに冷や汗が滲んできている。

脅すのは趣味じゃねえが…この際仕方ないとも思う。

俺がそんな考えを巡らせている最中。

京楽が口を開いた。

「分かった分かった…。乱菊ちゃんの事を思っ、言わない方がいいかなとは思ってたんだけど…」

「…っーことは…松本なんだな？」

京楽が言い終える前に、俺は結論を急ぐ。

つい胸倉を掴みたくなるくらいだ。

その衝動を抑えながら、俺は京楽の返答を待つ。

少しの間があつてから、

「ま…まあ…」

俺から少し遠のいた京楽が、そう言った。

俺は礼も言わず扉に手をかけて、息を吸い込む。

叫びたいのを我慢して、すぐに息を吐き出す。

扉を出来るだけ静かに開けて、勢いよく閉めた。

その音は、しばらく辺りの空気を揺らしていた。

その事実を知った俺は、今この状態にいる、というわけだ。もちろん、言うまでも無く、腸は煮えくり返っている。あの野郎…酒呑んだ時の事は全く覚えてねえんだな…。改めて、そう実感させられる。

「…松本の野郎…何処に居やがる…」

握りこぶしに力をこめて、通路のど真ん中を歩く。

（――落ち着け…）

そう思つては見るも、一度頂点に達した怒りは、なかなかおさまらない。

仕事のサボりなら何度も経験があるから最近は慣れてきた。

…が…。

根も葉もない噂を流すのだけは…何か知らねえけど許せねえ…。

「しょうがねえな…とりあえず…」

…十番隊舎に戻ってみるか…。

そう思つて、今居る場所から踵を返す。

腕を組んで、ゆっくりと歩き始める。

今の焦っている気持ちを落ち着かせるように。

イライラは消えないが、何とか殺気だけは消えてきた。殺しはしないが…。

「…せめて…」

せめて、氷付けだな。
背中にある氷輪丸に、指先だけ、触れてみた。

誰なんだろう？

あたしの心臓は、今にも口から飛び出るんじゃないかってくらいに跳ね上がっている。

鼓動の音が、周囲に響いちゃうんじゃないかって言うくらいに。理由は一つ。

近くに、日番谷くんの霊圧を感じたから。

それも、結構殺気の籠った…ね。

あたしは無関係なんだけど、酷く怯えている乱菊さんを見ると、こっちまで不安になってくるから怖い。

日番谷くんがホントに乱菊さんを氷付けにしちやいそうな気がしてきた…。

「ら…乱菊さん、お、落ち着いてくださいよ…」

あたしの声も、上ずっている。

乱菊さんは後ろに少し後ろに下がって、今にも帰ろうとしているのがあたしの視界の端のほうに見えた。

「あーら、乱菊さ…」

あたしの声は、途中で止まる。

乱菊さんの背後に、見覚えのある銀色が見えたから。

——…まずい…。

直感した。

少し中腰で、前傾姿勢。

完全に攻撃態勢なのが遠目から見ても丸分かりだ。

「松本…てめえ…」

ドスのきいた低い声が、離れているあたしの耳の鼓膜を振るわせる。同時に、背中の神経を逆なでされたみたいに鳥肌がゾツと立った。乱菊さんが恐る恐る振り返っているのが見えて、あたしはそこまで駆け寄っているところだった。

「隊長…そのお…」

一つ一つの言葉をちよつとづつ繋げていつて、乱菊さんは謝罪の言葉を述べていつている。

日番谷くんは姿勢をいつもみたいにシャンと正して、腕を組む。肩にかけていた斬魂刀を地面に置いたところを見ると、日番谷くんの方もだいぶ落ち着きを取り戻してるんだって事が伺える。あたしは黙って、乱菊さん言葉を聞いていた。

「…すいませんでした…」

深々と乱菊さんは頭を下げた。蜂蜜色の髪が、少し揺れる。

相当懲りているようで、乱菊さんがとっても小さく見えていた。日番谷くんもそれを見て、バツが悪そうに頭をかいて、小さく息を吐いた。

何にも言わないで、乱菊さんに静かに背を向けて、地面の斬魂刀を拾い、片手に持った。

数歩、歩いたところで日番谷くんは口を開く。

「次やったら氷付けだからな」

そう言つて、足音を立てないで歩いていつてしまった。

乱菊さんはいったら、ポカンと少し間の抜けた顔をしていて、あ

たしはつい笑ってしまった。

その笑いにつられて、乱菊さんも笑い始める。

「ね？さっき、言ったじゃないですか」

少し落ち着いたときに、あたしは笑って出てきた涙を人差し指で拭いて、乱菊さんに言った。

「日番谷くんは、すごく優しいんですよ！」

乱菊さんは、少し考えて、

「そうね…そうかしらね？」

そう言う。

まるで、自問自答のよう。

こういうのは自問自答じゃないかもしれないけど、声には出してないだけで、心の中ではもう答えを出しているのも自問自答なんじゃないのかな、ってこの瞬間に思った。

答えが出ているんだろうけど、乱菊さんはあたしに答えを求めるように視線を向けてきた。

あたしは自信を持って、

「そうですよ！」

と答える。

乱菊さんは納得したようにうんうんと首を上下に振った。

その時、スツとした氷の香りが鼻先を掠めて、そのままその香りは上空へと舞い上げられていった。

乱菊さんと別れて、あたしは一人、五番隊の隊首室へと足を運んで行く。

昔は藍染隊長が居た、この部屋。

いつもは、隊長が居ないこの部屋に戻ってくる度に自分の無力さと悲しさが一気に込み上げてきて涙が零れてるんだけど、今日は何故かそれが無い。

きっと、別のことで頭がいっぱいだったから、だと思う。

この部屋はただの景色として、今のあたしには捉えられている。

「もし——」

もし、本当に日番谷くんに彼女が居たとしたら——？

それは、誰なんだろう…？

彼女

——あの変な噂事件から、長い月日が経ってからの話。

「たーいーちよー!」

乱菊の声が、いつものように隊首室を賑わしていた。

そして負けじといつものように、日番谷はその声を無視する。

乱菊は数回、日番谷をちらちら見ながら、笑顔を作ってその話題を切り出す。

乱菊自身、この話題はトラウマに等しいものなのにも関わらず。

「彼女、居ませんよね?」

どこかで聞いたことのあるような会話。

日番谷は筆をピタリと止め、眉を少し動かした。

「…またてめえが流したんじゃないだろうな…」

キツと、翡翠の目が乱菊を睨んだ。

乱菊は慌てて、「違いますよ!ホントにあの時は反省してましたから!」と、必死に弁解をする。

日番谷は筆を置いて、肘を付いた。

幼少の頃、立っていた髪は今は少し伸びて垂れてきている。

その柔らかそうな銀色の髪を日番谷はぐしゃぐしゃと片手で掻き回し、ため息をついた。

「…誰かに見られてたのか…?」

小声で言ったその言葉に、乱菊は気が付いていなかった。
それを確認すると、日番谷は立ち上がり、乱菊の肩に手をかけた。
すっかり短くなってしまった隊首羽織を、乱菊は見つめる。

「悪い。少し…出かけてくる」

前より一段と低くなったその声を聞いて、乱菊は「どーぞ」と安心したように言った。

扉が閉まって、日番谷の気配がなくなってから、乱菊は一人、小さく微笑んでいた。

二人の行方を、案じていたかのように。
乱菊は、全て知っていたのだ。

「雛森」

その声が聞こえたのは、雛森が図書館にこもって二冊目の本を読み終わった後だった。

雛森は本を静かに置いて、日番谷の方に視線を向ける。

「どうしたの？日番谷くん」

「いや…悪い、ちょっと来てくんねえ？」

雛森よりすっかり大きくなった日番谷は、柄に合わず頬を少し紅く染めながら、そう言った。

「うん！」

一方、雛森は何年経っても変わらないその笑顔を振りまいて、日番

谷の後に付いて行く。

日番谷は腕を組んで、少し早めのペースで歩いて行った。

雛森の笑顔が、最近増えている事に気が付いた者は、たくさん居るだろう。

しかし、その理由を知っている者は、恐らく、三人しか居ない。

雛森自身と、日番谷。

そして――。

二人は木の下の木陰で話していた。

「なんか知らねえけど…どこから漏れてるっぽいな…。情報が」

「…うーん…やっぱり乱菊さんにはれてたんじゃないかな？ほら、シロちゃんは顔に出やすいから！」

「『シロちゃん』はやめろって」と言いつつも、前のように強くは言わない。

雛森自身も、前のようにそう呼ぶことに抵抗を持たなくなった。

「…松本、か？…やっぱり」

「あたしはそう思うなあ…」

「…何か…俺のせいではれた、とか思ってたんじゃないかな…」

いつに無く消極的で、弱気な日番谷に、雛森は「そんな事ないよ！」と笑顔で言った。

雛森自身、もうばれても良いと思っているかもしれないから、そう言えたのかもしれない。

日番谷は、「…ならいいんだけどな」と小声で、顔を隠しながらそう言った。

恐らく、耳まで赤いのだろう。雛森はそう判断して、日番谷に背を向けた。

「それじゃあ…言いに行こうか？乱菊さんに！」

「…そうだな」

日番谷はスッと立ち上がり、雛森に手を差し出した。

雛森は少し戸惑い、日番谷の目を見る。

「言いに行くなら、堂々と行こうぜ？」

少し意地悪っぽく笑う日番谷に、雛森は「そうだね！」と笑顔で言っ
つて、日番谷の手をとった。

がちやりと、ドアが開く音がした。

ソファに居た乱菊は、「あ、おかえりなさい、隊長」と言いなが
らドアの方を見る。そして、

「…と、雛森も」

そう付け足した。

乱菊の視線はもちろん繋がれている二人の手のほうへ直行。そして
口元に優しい笑みを浮かべる。

「…あのお…乱菊さん、やっぱり気付いてました？」

雛森がおずおずと聞くと、乱菊は雛森のほうを見て、もちろん、と
でも言うかのように頷いた。

終いには日番谷を指差し、「すぐに顔に出すから」と笑い始める。

「…悪かったな、顔に出やすくて」

と、少し拗ねながらそう言う日番谷を見て、雛森も小さく笑い始めた。

しばらくの談笑があつてから、雛森は話を切り出す。

「乱菊さん、気付いてるから言わなくても良いんだろうけど…一応、言つときます」

乱菊は肘をついて、「何よ？」と、雛森の姉のように、優しくそう言った。ずっと、その言葉を待っていたかのように興味津々に耳を傾ける。

雛森が言おうとしているのを、日番谷が止めて、日番谷が話し出す。

「俺達、付き合い始めた」

「…で？」

『で？』…そう帰ってくるとは到底思っていなかった日番谷は、一瞬慌てた。

しかし、すぐに表情を改めて、小さく咳払いをする。乱菊にも雛森にも背を向けて、

「…俺が護る…から…」

たどたどしく、そう言う。

乱菊は意地悪そうに、そして、遊んでいるように、「誰を？」と聞き返す。

日番谷は一瞬乱菊を睨むが、ここはもう逃げ場が無いと確信して、口を開いた。

「……雛」

「雛森？」

日番谷が言おうとした言葉を、乱菊は止めた。そう。まるで、「雛森」とは呼ぶな」という言い方で。

「……桃」

プライドがズタボロにされた日番谷が、やっとの事で口にした言葉に、雛森は赤面する。

乱菊はそれを見て、思う。

——未だ二人とも初々しいわね……。

二人とも赤面して、全く会話になっていない。ただの単語が並んで言っているような感じ。

松本は、小さく笑って、

「それじゃ、広めてきますねっ」

元気よく、部屋を飛び出して行った。

彼女（後書き）

… 日×雛です。

気に入ってもらえると嬉しいのですが…（^^；
次は…どうしましょうか…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0334g/>

彼女

2010年10月10日20時29分発行